

「ヨゼフ津田季穂の生涯と世界観」資料

八木和彦

○津田季穂プロフィール

- 1899年(明治32) 11月23日、日光に内科医長、神吉翁次郎、いせの五男として生まれる。(神吉翁次郎は徳川公爵の主治医) 1901年(明治34)富山、1905年(明治38)敦賀、1907年(明治40)東京小日向町、1912年(明治45)音羽に移る。
- 1914年(大正 3) 11月、従兄の猟銃を書生が持ち出し、右目に向けて「撃つぞ!」と言った。「撃て!」と答えると発射。生命危篤となり、翌未明東大病院に運ばれ奇跡的に助かるが、このときの心労がもとで母を失う。叔母の津田姓(父の旧姓)を継ぐ。
中村不折、関根正二らのいる太平洋画会に通う。
- 1917年(大正 6) 日本美術院展に入選し美術院に入る。村山槐多と親交をもつ。
- 1920年(大正 9) 日本美術院洋画部解散などの事件以後展覧会を離れ、以後放浪生活を送る。大阪に住み、上海に渡り、和歌山県田辺では漁師になろうとした。
- 1929年(昭和 4) この頃、ケーブル博士に傾倒して、世界観の変化。
- 1935年(昭和10) みかん山を栽培しようと思ひ立ち、兵庫県に住む。植えつけて去り、名古屋に行く。
- 1936年(昭和11) 二・二六事件のあと帰京。長崎町のアトリエ村に住む。
- 1939年(昭和14) 稲垣足穂と知る。牛込横寺町に移る。丸山薫、石川淳、辻潤、衣巻省三らと会う。この頃のことは稲垣足穂の自伝的小説「弥勒」、「幼きイエズスの春に」等に活写されている。
- 1942年(昭和17) 3月、富永踏(画家・後にベニウズ会員)とともに、鳴門の富永氏実家を訪ねる。「小さき花—聖女小さきテレジアの自叙傳」を読み、感銘を受ける。
- 1943年(昭和18) 正月「小さき花」の訳者ブスケ神父を西宮市カトリック夙川教会を訪ねる。東京関口教会の神父を紹介される。2月と5月に鳴門(5月から大村正家に)滞在。7月、関口教会で洗礼を受ける。洗礼名ヨゼフ。
- 1944年(昭和19) 2月、結核性骨膜炎にかかり、帝大病院で右足首の上から切断。春と秋に鳴門を訪れる。
- 1945年(昭和20) 徳島教会で滞在。徳島市民病院で右足を膝の下から切断。退院後いくばくもない7月4日、徳島大空襲に遭う。東京小石川徳川邸で終戦の詔勅を聴く。赤穂、高知、東京、鳴門などを行き来する。
- 1947年(昭和22) 鳴門大村家二階に住む。鳴門に生まれた絵画グループ「ベニウズ」に参加。
- 1952年(昭和27) 安芸オブレート会修練院で着衣式。
- 1959年(昭和34) 安芸、海の星教会で修道終生誓願。修道士となる。
- 1960年(昭和35) 福岡、古賀教会に赴任。高橋睦郎を知る。
- 1967年(昭和42) 福岡フォルム画廊で個展。
- 1968年(昭和43) 徳島、阿南教会に転任。ベニウズより画集出版。
- 1970年(昭和45) 鳴門市撫養町斎田に住居兼アトリエを持ち、阿南と鳴門を行き来する。
- 1971年(昭和46) 大阪日動画廊で個展。
- 1972年(昭和47) 東京日動サロンで個展。呉茂一、鷺巣繁男、吉岡実と知る。大阪日動画廊個展。
- 1973年(昭和48) 大阪高宮画廊で個展。(1980年まで毎年開催)
- 1980年(昭和55) 高宮画廊より画集出版。8月より鳴門に定住。
- 1981年(昭和56) 喉頭癌のため死去。享年81歳。NHK教育テレビ「日曜美術館」で紹介される。



1982年(昭和57) 高宮画廊、徳島県郷土文化会館で遺作展。

1983年、84年、87年、90年、93年、97年、2003年、2008年、高宮画廊で遺作展。

2000年(平成12) 徳島県立近代美術館 開館10周年記念展「近代徳島の美術家列伝」で2点紹介される。

2009年(平成21) 10月～11月、高宮画廊、鳴門市立図書館で「津田季穂展」開催。

2013年(平成25) 「ベニウズの先人たち展」に10点出品。

2017年(平成29) 創立70周年記念 第64回ベニウズ展に3点出品。

2018年(平成30) 第65回ベニウズ展 ー先人たちとともにー に14点出品。

○津田季穂との出会い

「何のため力まなければならぬのか、人が相手だからでしょう。相手が神さまなら力む気にはならない筈だ。」

「要するに芸術は遊びなんだということを忘れてはならないと思います。」

「私は思う、偉大な壮麗な、大規模な、人を驚倒させるような、所謂一大惑星となるよりはむしろ野に咲く名も知れぬ小さな花となることこそ望ましい。ダリアやバラにはさほど驚かないが、あの小さな小さな黄色や紫の花をつけた、心なき人に踏みつけられて暫く咲くあれらの花にこそ、もっとも驚くべき神の創造の神秘を見つけませんか。私はあれらの名もない花の美しさを見ると胸が熱くなります。つむことは出来ない。ふみつけるか愛でるか二つに一つ。そんな画家になりたいー」

(ベニウズ発行「津田季穂画集」1968 「津田季穂の言葉 雑賀公秀への書簡より抜萃」より)

○徳島新聞 出会いの風景「純粹に描く大切さ 師・津田季穂について」(八木和彦 2004. 6. 10)より

…美術教師になって10年余り後、鳴門教育大学院で研修を受けた際、彼についての論文を書いた。このとき、その生涯を調べていて、彼の生き方に最も大きな影響を与えたのは母なのだ、とあらためて気付かせられた。右目を撃たれ、危篤になった彼の看病疲れがもとで亡くなった母。やさしく物静かで、それこそ「小さな花」のようだった母。はらわたもちぎれるような悔悟の後、目には見えなくなったが、心の中に生きつづける母の存在の向こうに、彼は神を観たのだと思う。

本当に大切なものは身近にあるのだ。彼のように、それに生涯を捧げたいと、今も思う。

○「ケーブル博士随筆集」(1928・昭和3年 岩波文庫)より

ロマン主義とは何か。

(ロマン的なるものの) 本質は「何」にあらずして「いかに」にある、取扱う事象にあらずして、事象に対して取る私の態度に存する、一従って私の感じ方にある。それは私のうちにあつて、外に存しない。

(無限なる者は) 私の現象的生活においてそれをめがけて努力することだけではできても、ついに到達しえないところのものである。それ故に芸術的作品において表現されうるものはただ無限なる者を追う努力に止まる。

現実とは、即ち我らの現象的生存に対して真実にして意義ある有限物一切は、空無、仮幻と見えなければならぬ…

…地上においてなおないうべき唯一の事は、人間界ならびに自然界において「青い花(ブラウエ・

ブルーメ)を索めること、一かつて観たる永遠なるものを想起せしむべき或る物を見出しえんと
の望をもって、愛の心から現象を追い行くということ、しかもまた索むるものをその中に見出しえ
ざる時は、たちどころにそれを見棄てるということである。

そうして人間はひとり永遠においてのみ、神においてのみ、このような所有に、換言すれば平安と
浄福とに達する—

…自然そのものは「理想を追うロマン的憧憬」を知っている、そしてこの宇宙的ロマン主義の認
識根拠は即ち万有を支配せる進化の原理である。—

○第12回ベニウズ展 (1959・昭和34年) リーフレットより

…現実の把握を目的とせず芸術自体を目的とする者はかえって芸術に達しないだろうし、現実
は汲みつくしがたい豊かな謎にみちているという認識が、それを捉えようとする熱情の源になる。

いっさいの現実が限りなく美しいということを見出すのが芸術家であり、そのことをわれわれに
教えるのが芸術の意味だろう。 —べにうづ会誌より—

「われわれの仕事はまだ終わっていない」

○「小さき花—聖女小さきテレジアの自叙傳」(シルベン・ブスケ訳 1911年発行)より

私は完徳の険しい階段を攀登するには餘り小さ過ぎますから、何卒して聖主の許に昇る為一つの
昇降器を見附たいと思ひました。それで私の目的たる此昇降器は何処に在るかといふ事を、聖書
の中に捜して居りますと、叡智ある主の御口から出た次の聖言を読みました。『若し誰か、至って小
さき者があれば我に来れよ(箴言9ノ4)』と乃で私は捜して居った昇降器が見當ったといふ事を察し
て、早速天主様に近づき、尚も此「至って小さき者」に對して何を為さるのであらうか、といふ事
を知りたいと思ひましたので、續いて復た探しました、スルト「慈母が其子を愛撫するが如くに、
我も汝等を慰め、汝等を懐き、そして膝の上に置きて汝等を揺り動かさん(イザヤ書46ノ1)といふ
言葉が見當りました。ああ、今迄私の靈魂を喜ばした言葉の中に、此よりも愛情の深い、調子の能
き言葉をまだ聴いた事がありません。私を天まで引き上げねばならぬ昇降器は、耶蘇様よ、主の御
手であります。是あるが為には私は大きくなる必要がなく、却って小さき其儘で甘んじ、尚益々小
さい者とならねばなりません。天主様よ、主は私の望みに超過ぎた恩寵を與えて下さいましたから、
私は主の御愛憐を歌いませう。『主は私を幼き時より教え導いて下さいました。私は今に至るまで
主の奇しき御業を宣べ傳へました、が尚齡を重ねるとも續いて之を宣べ傳へませう。(詩篇70ノ18)』
…と。(P. 246-247)

(アグネス童貞)「和女が人々に教えたいといふ柔しい「小児の道」は如何なる道であるか」「母様、其
は他でもなく靈魂上小児の如くになるといふ事、即ち人々は幼児が親に對するが如くに、天主様に
對して之を愛し之に依歸り、萬事を其聖慮のままに御任せ申すといふ道であります。私は彼等に
私に良き結果を得させた所の、柔しい方法を教え示し、此世界に於ては唯一の事だけ必要である
といふ事を告げたいのであります。此唯一の事といふのは、即ち小さき犠牲を、花として主耶蘇様に
献げる事であつて、愛を以て耶蘇様を招き迎える事であります。私は斯の如くにして主を招き迎
へました。それで私は之が為には非常に手厚く歓待されるのでありませう。」(P. 400-401)

此小さき者のままで居るといふ事は即ち自分の虚無なる事を認めて萬事主の援理に依託する事、そ
して自分の過失の為に餘り嘆かぬ事、約めて言へば何事に就ても心を煩はさぬ事と寶物を持たぬ
事とであります。(P. 430)

…主耶蘇様は疑もなく望ましく願はしい總ての善徳を持ってお居でになります。が若し云ひ得るな

らば…それと同時に一の大きな病氣弱點とがあります。之は即ち盲目で在らせられるといふ事でもあります。そして御存じのない一の學問がある。即ち計算せない事とであります。此二大弱點は若し世間の良人にあつたならば洵に惜むべき缺點でありませう。然し吾等の天配に於ては却て之が為に一層深く我等に愛の心を惹起させます。もし主が明に視る事と、能く數へる事とが必要であるならば、我等の凡ての罪惡を御覽になる時には、必ず我等を無に歸せずには居られますまい！然し事實は決して左様ではなく、我等に對する愛の為に主は盲目のやうになられます。(P. 458)

即ち完徳に達するには自分を無虚者であると認め、小児の如く我身を主の御手に委ねさへすれば宜しいといふ事が分ります。…何となれば、獨り子供等、又彼等に似て居る者のみ、天國の宴に列席するを甘んじ喜ぶ事が出来るからであります。(マタイ19ノ14) (P. 605)

寔に耶穌様は我等の愛の眼付、愛の呼吸で満足して下さいます。私は完徳に進む事はまことに容易い事であると思ひます。乃ち耶穌様の正義に訴へるよりも、御愛憐に靠る方が宜しいといふ事を曉りましたから…。彼の小児…親の意に逆ひ、命令を聞かずして、親に腹立たせた所の…小児を御覽なさい。若し彼は勃戻た態をして隅に匿れるとか、或は罰せられてはと心配し、大聲で泣叫んだりするならば、母親は却て其罪科を赦しますまい。然し若し彼は、平伏して其愛らしき両手を重ねお母様再び左様な事を致しませんから、何卒赦免して下さいと、謝罪したならば、母親は必ず直様深き愛情を以て膝の上に抱上げ、其愛の為に前の罪科を悉皆忘れて了うではありませんか…。それでも母親は、此愛らしい小児は機會さへあらば、再び同じ惡戯を為すに相違ないといふ事を能く知って居ります。然し小児は復新に母の愛情に縋るならば、いつまでも罰せられる事を免れるであります。

…『母親は自分の乳児を忘るる事あらんや、縱令母親が己の児を忘るる事ありとも、我は汝を忘るる事なし(イザヤ書49ノ15)』 (P. 586)

聖主がまだ御在世中聖靈によりて喜びに堪へず仰せられたには、『天地の主なる父よ、我汝を稱讚す。其は是等の事を學者智者に隠して、小さき人々に顯し給ひたればなり(路加10ノ21)』…と。私は至って小さく弱き者でありましたから、聖主は私の方に下りて身を屈められ、柔らかに御自分の愛の秘密を教えて下さいました。(P. 123)

私の唯一の大望は、天主の懷の中に小さき子供になる事である。(ピオ九世)
己を全く天主に任せることは、愛の絶頂である。其の絶頂の絶頂は子供の精神である。(グ司教) (P. 240)

愛の中には總て天職が含まれて居る、愛は總てである、愛は永遠であるから、總ての時代總ての場所に及ぶといふ事をも悟りました。其時私は氣も狂はんばかりに喜んで斯く叫びました「我が親愛なる主耶穌様よ。私の天職は漸く見附りました、私の天職は即ち愛であります。…」 (P. 348)

○1977年2月9日(水) 津田季穂との対話

「私にとって幼い頃の思い出はとても美しいもので、何かそこにとても大事なものがあるような気がしていますし、絵にもそのようなものを描いてみたいと思つて居るのですが、それはいけないことなんでしょうか。」という私の個人的な質問に答えて…

- ・それがすべてです。人の描く絵は3歳までに描いたもので決まりますね。だいたい偉大な芸術家の絵もそれが元になっていますね。
- ・人というのは3つまでのことでもう決まっていますね。人間っていうのはそれ以上よくはならないんです。むしろ悪くなっていくんです。
- ・確かに小さい頃にはきれいな世界、言うに言われぬものがありますね。でもほとんどの人は忘れ

てしまっているんです。それで下らないことばかりやっている。そして何かやりきれなくなって酒なんか飲んだりするんです。

・(それを覚えているということが) 才能っていうものでしょうね。人はもうそれで決まっているんです。

・でも小さいときに描いたものは(それはいいものだけれども) 芸術とは言えないんです。表わせてないんです。何か感じとって描こうとするんですけどね。芸術っていうのはそれを見出して表わすことなんです。

・一生かかってもとにもどるんですね。

○1978年8月23日(水) 津田季穂の言葉(公教要理)

・奇跡とは自然法を超えたものであって、偶然的な何かを指して言うのでは決してないということ。

・「神の国はあなたたちの心の中にある」と言われたということ。未来にあるものではなく、「今」、実現されねばならないのだということ。神の国とは空間的な何かではないということ。

・私はかつて永遠に生きるなどということは耐えられないだろうと思った。死とともに自分という存在がなくなってしまった方がいいと思った。しかし我々の魂は永遠である。自然である自分が、いつかは超自然に属することになるということ。

・人間は希望がなければ生きていけない。またあやふやなものに希望をかけることはできない。(多くの人々はつまらないものに期待をかけて生きているが。) 本当は人の世には絶望しかないということ—もしキリストがいなければ。(キリストを通して我々の存在は永遠へとつながる。)

・ガリラヤの風がおる丘で、花咲きみだれる丘の上で、イエズスは話された。「空の鳥をごらんください…」(この情景は神の国がどんなものであるかということを示唆してはいないだろうか。)

・何にも役に立たないということはすばらしいことで、何でもできる、人のためになるなどということは全くくだらないことだ。何でもでき、何でもてきばきとやり、人の役に立つ人(この世に生きている人)—そういう人は大きな称讃を得るが、この世ですべての報いを受け、それで終わりである。何にもできない、ちっとも人の役に立たない、この世のことには不器用な人—そういう人はみんなから馬鹿にされるが、実はそういう人たちがこの地球を支えている。(霊的な(ささやかで美しい)ものがすべてを支えている。)役に立たないということは尊いことだ。

・教会でもそうだ。役に立つ人—大きな声で祈りを唱え、聖歌を歌い、いかにも信仰があるように見える人—そういう人は皆から尊ばれるが、そんなのはみんな嘘です。いてもいなくてもいいような人、信仰があるのかないのかわからないような人—(見る目があればわかるのだが)そういう人こそ本物であることもある。聖人というのもみなそうであった。この世から聖別されている人たちである。

○1979年11月28日(水) 津田季穂の言葉(公教要理)

・(教会で行われた信徒大会などについて) みんな何かのためにやっている。召命のため(神の召し出しのこと。日本のカトリック教会では、神父や修道者の志願者が少なく、神の召命と、それに応える青少年が多くなるよう願われている。)、宣伝のため、等々。いいことのためにするのならそれもいいが…。何かみんな魂胆があるんですね。本当に純粋なものはいかに少ないか…。

・ものごとには、どれにもみんな二つの道がある。何にでも悲観的な人と、何にでも楽観的な人と…カトリックというの楽観なんですね。何に対しても悪気を持たずいい方にばかりとる人が、本当にいい人なのかもしれませんね。

・絵についてもそうでしょう。二つの道があるでしょう。自分を生かして、自分の努力でやっていく行き方と、自分というものがなくなるほどに対象を大切にして、すべて来るものに任せてやっていく行き方と…。普通には自分の努力というのが大切で、それが偉いということになるんでしょうが…。

・何でも頭で考えるのではなく、心でとらえなければなりません。何でも信じまいとすることはたやすいことですが、信じなければ、それ以上向上することはありません。信じなければ進歩はありません。普通には、信じないで疑って、いろいろと考えるのが頭が良い証拠だと言って尊ばれるのですが、考えることよりも心です。心でとらえること。信じれば…、信じて少しでもそれに近づいて行こうとするならば、進歩があります。

・何でも悪いところばかり見ていけばきりがありません。そうだ、私はこの頃こういうことを考えていたんです。朝太陽が昇って、夕方になれば沈んでいく…。こんなきれいなものがあるのでしょうか。いろんな人工のもので汚されているとはいえ、いたるところに草は生えて、自然のままの一角があります。これらを見ると、本当にこの世は楽園じゃないかと思えます。そうだ、人間でも自然でも悪いところを見ていけばきりがない、それこそ絶望的にならざるを得ませんが、いいところを見ていけば本当にいいものじゃありませんか…。

○鳴門教会機関紙「燭台」再刊第11号(1966. 2. 20)

浮彫鳴門教会史10 第8章 三ツ石山風景(今井貞貴)

昭和22年7月22日のひるさがり、津田さん、東さん、雑賀さん、私は、小桑島宝海運わきの突堤に腰をすえて、三ツ石山風景をかいた。

当時小桑島は、小鳴門橋もなくボートレース場もなく、そこに行く道は砂利道で、道の両側には夏草が茂り、長い突堤に宝海運の発着場がぼつんとあるきりで、そこから北に三ツ石山が悠然と見える。みんなで三ツ石山をかこうと相談したのでなく、描きはじめてらみんな三ツ石山を描いていた。

自動車もなかった。通るわけではない。たまにのんびりと通行人が通りかかっても振り返る人もない。ま夏の昼さがりは時間が止まったようであった。

津田さんは洗濯のきいた白い軍隊ズボンを片足を中程でしばり上げて、両脇の松葉杖に身体を托して、一步一步歩いてゆかれた。東さんはぞうりばきで、白シャツの長袖をたくっていた。雑賀さんと私は襟なしのシャツと軍隊ズボンで下駄ばきだった。

夕方ほうめいかくのサイレンがなった。それが六時である。サイレンは悲惨な空襲の思い出がよみがえる。そのサイレンが音一つない小桑島の突堤に鳴りひびくと、私達は我にかえった。あたりにしのぎよい夕方の風が、海の方からかすかに吹いてくるのを感じた。ほっとしたのだった。

戦争は終わっていた。今私達に、何かが始まった。それは大変充実したものであった。大村さんの二階は夜更けになると、広い室に涼しい風が吹いて来て、静かでおちつきはらっていた。

東さんと雑賀さんと私は、ならんで座り津田さんはぼつりぼつり絵の話をはじめた。

鳴門教会の一粒の種は、大村さんの二階でまかれた。

○鳴門教会機関紙「燭台」再刊第24号(1968. 7. 28)

浮彫鳴門教会史21 ロビタイ神父さんのこと(今井貞貴) (抜粋)

昨年(昭和42年)の暮れからお正月にかけて、オプレート会本部に、乾神父さんとロビタイ神父さんを訪ねた。ロビタイ神父さんから19年前の写真をいただいて、そのころのお話をした。

その写真は昭和24年8月15日、大村さんの二階で被昇天を祝っているところだった。左からロビタイ神父さん、ビール2本をはさんで田中司教さん、若き日の若色神父さん、津田さんとならんでいる。

ロビタイ神父さんは「この写真にむかって、鳴門のみなさんが一たしか何人ほどでしたか、おぼえていますが一むきあってすわってましたね」とお話をされた。このときの田中司教さんとロビタイ神父さんの会話は、すでに田中司教さんの寄稿「カトリック研究」「月の光の会」でこの燭台に紹介済みである。写真にはビールが写っているが、写っていない私たちの方ではもっぱら焼酎がならんでいた。ロビタイ神父さんは、それを飲まれて「ムーン・シャイン(月の光)」とおっしゃった。

月の光で作る酒—密造酒の味とよく似ているとの意味である。

○便り (1966. 9. 11「燭台」再刊第十三号に掲載) 田中英吉司教

燭台聖母被昇天号ありがとうございます。つい、読んでいるうちに面白くなってみな読んでしまいました。今井さんの鳴門の歴史、大村氏二階の段の光景は、よく書けていました。私が初めてロビタイ神父さんをつれて行ったとき、その集会を説明して、「神父さん、ここに集まる連中はもともと面の勉強のためでしたが、大村さんや津田さん(修士)の熱心でいつの間にかカトリック研究所になってしまいました。近所の人は大村さんここではこのごろカトリ(蚊取り)の研究していなはるほうでといいました。これはまた月の光の会でもありました」と申し上げると、ロビタイ神父さまは大笑いなさいました。

○鳴門教会機関紙「燭台」再刊第15号(1968. 11. 1) 浮影鳴門教会史13 思い出の記(松前博子)

今から思い出しますと17年も前のことになりましょうか、昭和24年の秋だったと思います。そのころ主人は体を悪くしまして1か月余りも床についておりました。

ある秋晴れのさわやかな午後でした。玄関に、もの静かなお声で「ごめんください」と訪れるお客さまがありました。急いで出て見ますと、黒い眼鏡をかけて足のご不自由な方と東さん、三原さんとが立っていらっしゃいました。黒の眼鏡の中からやさしい眼がにっこりと笑っておられました。その方が津田先生でした。

早速上がっていただいて、いろいろと静かな話題が続きました。始めてお逢いした方とは思われぬ親しみを感じ、一時間ほども話してお帰りになされました。それからたびたびとたずねてくださって、そろそろと、神様のお話に入り、主人も私も一生懸命の質問をしながら、お話に聞き入りました。ある日など、わすかな配給酒で乏しい晩さんをしたこともありました。飲むほどに食べるほどに、信仰のお話も心深くしみ入って、夜ふけも忘れることもありました。

そのころ、長女が生まれてまもないころでしたので、私は公教要理を大村さんのお宅のあの二階に聞きに行きますのに、おんぶをして、おしめ袋をさげて、子どもをあやしながらお話を聞きました。普通の方の半分も耳に入らない日もありましたが、ゆっくりみ教えを聞いて、足早に行かないでも、神様はきっと許してくださると思いました。夕方近く、西の空が真赤にはえて、島を渡る風も肌寒い、秋の終わりの道を、心の中で暖かくほのぼのと喜びを感じながら帰途につきました。

その翌年長女が一番先に幼児洗礼を受け、私は8月15日に受洗しました。

○稲垣足穂「彌勒」より

ヒルティエの愛説者がお正月に伴ってきた隻眼の人が、ヤマニ酒場で云った沈痛な響きの言葉が彼の耳に残っていた—

「物事は何でも自分が思ったのとは反対の方へ傾いて行く。だから今年はお互いに、欠点を改めるよりもむしろ事態を意識するように…むしろ欠点を伸ばすように心掛けましょう」

.....

このように、よく生きようともがいても、なかなか思い通りに行くものではない人間の宿命を知り尽くし、小さき者たちへの深い憐れみ、共感があったからこそ、津田季穂の伝道は鳴門の人々に受け入れられ、愛されたのではないだろうか。

何年も前の御ミサの中での乾神父様のお話を、私はたびたび思い出す。
大村さんの二階…当時の巡回教会におられたとき、鳴門駅から津田先生が不自由な足を引きずって

歩いてこられるときの、コツコツという杖の音が心に残っているというお話…

その音は、神への生贄、尊い犠牲の音だったのではないだろうか。

持てるものをすべて与え尽くすことによって呼び込んだ、聖霊の訪れの音だったのではないだろうか。
(八木)

○橋本行正氏津田季穂を語る (1994年10月14日 口述の記録)

津田季穂の人となりについて

・人間でも絵でも、当たり前でなければならぬとよく言っていたが、津田先生自身も近くにいるだけで心がなごむ人だった。

出会い

・同級の橋本省さんが一晩泊まって信仰の話をした。ええ人がおるんじゃ、話聞きに行かんか、と言うので、省さんにつれられて大村さんの家に行った。二階に上がると黒い眼鏡をかけた人—津田さんが前に小さな絵をいっぱい広げて座っていた。それを東(伊三雄)さん、今井(貞貴)さん、雑賀(公秀)さんが何か話しながら見ていた。ちょうど田中(英吉)神父(後司教)から頼まれた徳島教会の聖堂のための「十字架の道行き」の絵が今描けたばかりということだった。省さんもすぐに絵の方へ行ってしまってみんなと一緒に絵の話をしてしまい、誰もかまってくれる人はいなかった。もう帰ろ、もう帰ろうと何度も思いながら3時間余りもみんなの話—絵のこと、信仰のこと—を黙って聴いていた。12時頃にみんなが帰りがけの時になって初めて津田さんが気付いて「この人、誰ですか」と声をかけてくれた。「公教要理を聴きにつれてきました。」と省さんが思い出したように返事をする。「それでは今からしましょう。」と言って公教要理の説明をしてくれた。…最初の出会いはそんなふうだった。

・徳島教会が新築になった時、雑賀さんがそれらの絵をもらいに行った。倉庫に入れたかもしれないというので、探してみたがなかった。金山さん(当時教会のまかないをしていた)に聞くと、神父さんが要らんからというので燃やしてしまった、ということであった。

・その頃のオブレート会の司祭(アメリカ人が多かった)は、日本人よりアメリカ人が偉いように思っていたのだろう。ロビタイ神父も、そのような態度を田中神父に指摘され、ぼろくそに言われて痛み入ったということがあった。「御聖体(パンの形に聖変化したキリストの体—聖堂の中、正面奥に安置されている)の前に行ったらアメリカ人も日本人も同じじゃ。」と…。

いくら話を聞いてもお祈りをしなかったら何もわからんと、祈祷本と一緒に省さんがくれた公教要理の本を持って、それから3か月の間毎晩一途中都合で1か月ぐらい休んだが—12時、1時まで津田さんの公教要理を聴いた。

いつごろからか硫黄さんと一緒になった。帰り道で津田さんの所へ行く三原さんによく会った。あれでは津田さんいつ寝るのだろうかよく思ったものだ。

8月になって硫黄さんが「反発しようと思って、こんなに本をかかえて行ったけど、洗礼を受けるといってしもた」と話した。「わしやまだほんなんいうてくれんわ」「アホ、ほんなん自分でいわなあくか。わしも自分でいうたんぞ」

…あの二階の広間でみんなで焼酎を飲む機会にたびたび恵まれたが、酔って話すことといえば、信仰生活に必要なことばかりだった。つまらぬ無駄話などは一つも聞くことがなかった。私は大村さんの二階で必要な良いことばかりを学んだ。
(この部分「浮影鳴門教会史15」より)

・今みたいな世界になっても(1962年～1965年の第二バチカン公会議後、カトリック教会内部では大きな変化があった)津田さんから聞いたカトリックだから(自分の信仰が)続いている。津田さんは自分で歩いて(カトリックの信仰を自分の体験で確かめて)自分で教えている。同じカト

リックでも、解釈の深淺は人それぞれだ。

受洗までの津田季穂

- ・津田さんは40歳過ぎてからのカトリックで、それまで随分悪いことをしてきた、というか見てきている。
- ・若い頃、絵描き友達に吉原へつれていかれて、目の前で女郎さんを抱いているところを見せられても平気だった。「よく平気でいられたね。」と言うと、「そりゃあこっちはその気がないんですもん、平気ですよ。」と言っていた。
- ・今よく言われている性の倒錯のようなものも、あらゆるものを見てきている、と言っていた。
- ・津田さんが20代の頃、佐渡おけさを歌って有名になった市丸さんという芸者さんが、東京で津田さんを好きになり、津田さんを追いかけてまわした、ということがあった。
- ・津田さんが上海に渡ったとき、「弥勒」に出てくるトンヤン・メーランファンと呼ばれる女性が津田さんを慕って上海まで追いかけていった。が、津田さんにはその気はなかった。ところがまたその女性を追って谷崎潤一郎が上海までやってきた。谷崎は脆いてその女性に求婚したが断られた、と聞いた。
- ・一生結婚する気はなかったんですか、と聞くと、「そんなことはないですよ。でも一回でも（肉体的に）交わったら、生涯人格的責任を持たなければいけないんです。それが私はこわかったんですよ。今の人から見れば卑怯なんでしょうけどね。」シャルル・ド・フーコーやアシジのフランシスコは回心するまでかなり放蕩をしているが、童貞であった。神様から守られていなければそういうことはできないだろう。
- ・志賀直哉や白樺派の文士たちは、一度吉原に行くとなんか遊びにのめり込んでしまった。それに比べると、そんな時代にあつて津田さんはものすごく素晴らしい人であつたと言えるのではないか。
- ・津田さんがカトリックになる前、父親から、おまえが結婚しなかつたことだけは羨ましい、と言われたというが、これは「結婚しないでもいられる」ということなのだろう。
- ・津田さんはロシア人の知り合いが多かつた。上海についてすぐ、コサックと一緒に飲んだと行つてた。ロシア語ペラペラですか、と聞くと、「酒飲んだらいけますよ（言葉などわからなくても、という意味か）。ついてこい、と言つたら5～6人ついてきましたよ。」
- ・このように津田さんはいいことも悪いことも、何もかも経験してきている。
- ・20～30年前、自分が人間の悪のことをなんでもないと言つたら、「知りもしないことを人前で言うもんじゃありません。そんなことを言うなら人間の悪について徹底的に調べてみたらどうですか。」と言われた。「但し、自分の信仰が保てた上で。」それで、マルキ・ド・サドの「悪徳の栄え」などいろいろ読んだが、途中で怖くなってやめてしまった。「よかつたら聞かせてあげます。私はあらゆる悪を全部現場で見つけています。」と津田さんは言つた。
- ・津田さんはそのような体験をいろいろしてきた後、小さきイエズスの聖テレジアの本を読んで感銘を受けた。どこに感銘を受けたのか。それはテレジアの、人前に出てくるのではなく、小さいままのもの…隠れた信仰生活ではないだろうか。
- ・テレジアは、「私は天国だけには居たくない。イエズス様と人々のため、天国に行つてからこちらに戻つてきます。バラの花（霊的な恵み）を降らします。」と約束している。そのバラの花のおかげでカトリックになつた人は、敬え切れないほどいるそうだ。「私はやっぱり、テレジアの小さき花の一輪でしたね。（自分はそれをもらつて、それと一緒になつた、ということ）」最晩年になつて津田さんはしみじみと言つてた。
- ・津田さんは、自分が悪く言われても平気で、顔色ひとつ変えないでいた。或る人が津田さんが目の前に居るのを知らずに、津田さんというのはいかんな人、こういう人と悪いことも言つたことがあつた。自分もその場に居合わせたか、津田さんが何を言われても全く知らん顔をしてたのには驚いた。普通の人なら少なからず何らかの反応をするのではないか。

修道士への召命に関して

- ・津田さんの公教要理を聞き出してから2、3年経って、津田さんはオブレート会に入った。田中神父から、頼まれたからだった。
- ・津田さんは田中神父からは信頼されていた。津田さんの偉大さがわかる人は（修道会の中でも）10人の中に1人か2人はいたのではないか。
- ・人から聞いた話だが、津田先生も司祭になりたかった時期があった。しかしあの頃のミサで司祭は何遍も祭壇の前に脆かねばならず、津田さんは足が悪かったのができなかった。
- ・教会の中で…ロビタイ神父は、始めは津田先生のような信仰は見たことがないと言っていた。しかし晩年津田先生を尊敬するようになった。
- ・結局、人間は死ぬために生きていられるのではないだろうか。「この頃、痛切に感じることは、死ぬことが怖ろしくなくなったということ、いま死ぬぞと言われても、そうかと言って、死が待てますね。」という津田さんの最後の言葉…しっかりと死と向き合っても、こういうことが言えるようになるために、カトリックの教えがあるのではないだろうか。

津田季穂と鳴門

- ・安芸(高知県)で修練をしていた時代も、津田さんが鳴門に来るとみんな「おかえりなさい」と言っていた。それを津田さんも楽しみにしていたようだ。そう言われるとあの顔でニコッととして、「不思議ですね。鳴門に来たらみんなおかえりなさいと言いますね。」と言っていた。
- ・あの頃洗礼を受けた人たちは津田先生を自分の親みたいにして思っていた。津田先生自身も鳴門の人たちを気に入って、なつかしむところがあったのではないか。風景が気に入ったというのではなく…。
- ・あの頃鳴門に集まっていた者の中には本当の兄弟意識があった。この世ならぬものを皆が求めて…やはりその雰囲気できたのは津田さんがいたからだろう。ものを言ってくれなくてもそこにいれば安心するという…それは誰にもあるらしい。三原(千栄子)さんも、仕事をやめてまで臨終まで付き合ったのは、そういうところがあったからではないか。自分も津田先生を親以上に思うところがあった。そうでなければ…洗礼を受けたとき親から痛め付けられて…そんな中で信仰を保つことはできなかつたらう。

文化出版局発行の雑誌「銀花」(第31号)が津田季穂を特集したとき(1977年)、高橋睦郎氏が「橋本さんの家は代代塩田をやっていた。ところが製塩が機械化され、塩田は廃止になった。若い橋本さんは衝撃で立ち上がれないほどの状態だった。このとき、橋本さんの前に津田さんが現われた。もし津田さんが現われなかったら、自分は再起できなかつたでしょう、と橋本さんは言う。」と書いていたが、ここで私(八木)はそのことについて尋ねた。すると当時のことを思い出されてか、涙を流され暫く言葉を詰まらせられた。「…それは言える。…親から言えばこれで耶穌やめるだろうということだったんだろうけどな…」橋本氏の当時の体験—それを具体的に伺うことはそれ以上できなかつたが—と、氏の津田師への深い思いが直にひしひしと伝わってきた。

- ・あの頃(昭和20年代頃)の鳴門には本当に兄弟意識というものがあつた。集まったら酒を飲んだが、飲んで話すのは信仰の話ばかりだった。そのうち酔った者同士が相撲をとり出して…それでその席は終わり、というふうだった。それがこの頃では初めて教会にきた人を御堂に案内するのが使徒職であるかのように思っている、そして信者同士では肝腎な時(本当に助けが必要な時)にそっぽを向いている…。殉教における脱魂などについても教えない。殉教者は自分の努力でそれを成し遂げたかのように思っている。そんなばかなことがあるものか。(脱魂という)神の助け無くして、殉教の苦しみを最後まで耐えられるはずがない。
- ・あの先生のおかげで、何百人か何千人かがカトリックになった。子供が洗礼を受けて信者になって、その信仰を見て母親が洗礼を受け、父親も洗礼を受け、家族が洗礼を受ける…という具合だった。「神様を見たければキリストを見よ。目に見えない神様が目に見えるように生まれてきてくれたのがキリストだ。」…これがカトリックの根本ではないだろうか。

○津田季穂の作品世界 ～「見えないものを観る」とはどういうことか～

1. どこまでも見る態度 —「自画像」(1950年頃)

・この作品では見える自然(鏡に映った自分の像)をどのように扱うか、
試行錯誤した跡が窺える。

・おぼろな像となっている
細部の克明な描写→最初のイメージから離れる
→全体イメージの中での細部表現を考える



・目に見えるもののみの描写を目指しているのではない。

・描いては壊し、描いては壊し、様々な方法が試みられている。
完成させるのを拒んでいるかのような追求の態度。



「彼は一女性をモデルに、そのカンヴァスを削り取ったり、再び盛り上げて行って、またもやそっくり削ってしまったたりして、ひと月以上を過ごし、なおどれくらい続くのか見当も付かないので、私はおどろいたことがある。こうして彼の重厚な、ゆるぎのないタブローが仕上がるのである。

(稲垣足穂「津田画伯の回想」1971)

・彼にとって「作品はしぼりかすのようなもの」
「いいものが出来上がるかどうかは、どうでもいいことです。描いている過程、描くそのことがたいせつなのです。」(津田季穂の言葉)



このような絵画追求の態度を彼は「写実」と呼んでいる。

・「写実」という言葉 ← realism 写実主義



観念的な理想を追うことなく実在的な現実をあるがままに描く

・津田は「真実(本質)を写す」というような意味で使っている。
目に見える自然の背後に見えざる「本質(=神)」があり、
ものを「見る」ことを通してそれを洞察し、その像を画面に写そうとした。

・対象をそのまま描こうとしても、見え方には様々なレベルがある。
人によって見え方は全く異なる。
それぞれのフィルター(記憶・カルマ・原罪)を通してものを見ている。

果たして「本質を観る」ことは可能なのか？

・イエス・キリスト「神の国はあなたたちのうちにある」(ルカによる福音17章21節)



人間は心の最も深いところで「本質を観る」ことができる。



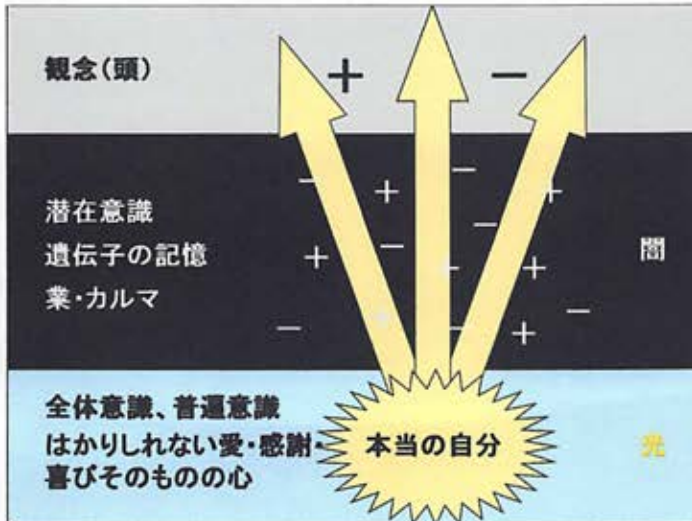
どうすれば？

・津田季穂：

「自分ではなく、あくまでも対象を大事にすること」によって…

∥

己(エゴ、個体意識、偽我、浅いレベルの自分)を無くするほどに対象に惹かれ、対象を愛することによって…



・「自画像」にもその態度の窺えたとおり、描くうちにできてくるものにとらわれず、毎瞬毎瞬自分を0にして、新たに対象を観る姿勢。そして観たものを表現するためにあらゆる方法を試みる姿勢。

↓

そのような謙虚で真摯な追求を続ける者に「本質」がその姿を垣間見させる瞬間が訪れる。

しかしそのとき垣間見るものは、日常の感覚からかけはなれた特異な何かでは決してない。(NHK教育テレビ「宗教の時間」1979 参照)

人はとかく自分の都合でものを見てしまうもの。その最たるものが近代の芸術であると言えるかもしれない。

自分の意図で対象を見る、変化させる
人のやっていない自分だけのものを意図的に作り出そうとする
第三者を意識した作為

↓

津田季穂の芸術

自分の見方を排除し、対象のありのまま(当たり前)の姿(本質)に迫る
「それこそが何よりも難しいこと」(津田季穂の言葉)

2. 彼岸と此岸 —「すもも」(1950年前後)

- ・「自画像」…内的な像を激しく求めている。
彼が求める内的な像—形態のうちに
封じ込めることは難しい。
内的なものを求めてはやる気持ちが
画面の形を突き崩している。

||

この世の現象の背後にある世界
—あの世(彼岸)を激しく求めている。



「すもも」…この世(此岸)をじっくり見つめ直している。

↑

水彩という素材の特性

- ・この絵において画面に変化とリズムを作り、個々の対象をつないでひとつの秩序—雰囲気を作っているのはすももの影、瓶のうしろの物陰である。
- ・「絵においては中心となる対象物以上に背景が大切にされなければならない。」
「雰囲気が表出されていなければならない。」(津田季穂の言葉)

背景・雰囲気とは、空間の質のことである。

- ・空間—様々な物質をその懐に擁し、物と物とをつなぐもの。
信仰の目で見れば、万物を生み出した空間は、ただ空虚なものではなく、
神の力に充ち満ちている。今も何かを生み出す可能性が漂っている。
- ・この絵の中で空間を占めているのは「影」である。
「この世の一切の物象は影を宿す運命にある。」今道友信(美学者・中世哲学研究者)
それは現世におけるあらゆる惨めさ、不完全さの象徴でもある。
しかし影は背後にあって物象を浮かび上がらせる。
陰は明らかに認識できないがゆえに、何ものかが潜んでいるような想像をかき立てさせる。
- ・影は物象の宿命であるとともに可能性でもある。
空間が神の力に満たされているのなら、影も自ずから変容の希望を秘めている。

後に津田の絵画の成長を支えたものは、
この世の特質である影というものへの深い洞察であった。

- ・「その影を光りに映ずる色彩にまで昇華する営みが津田季穂の芸術である。
それゆえ、その芸術は、物象に行きわたってある創造主の愛を想起させる。
我々のひとりひとりが背負ふ影にも、輝きへの遠い道がある。」今道友信
- ・「私は影になりたい。
まっ黒な影になりたい。
主をくっきりと写す影になりたい。」
「絵の美しさだって陰影の美しさですよ。」(津田季穂の言葉)

3. 「向こう」から来るもの —「海辺の馬」(1956年頃)

- ここに至って津田季穂独特の色彩が出現している。
深く玄妙だが、明るく自由な色彩。



物と空間をつなぐもの

…「すもも」の暗い影→優しい色(光)に変容

- 「自画像」—内的な像をがむしゃらに追求 …彼岸
 - 「すもも」—目に見える自然をどこまでも描く …此岸
- 統合…「感動の持続」による

- 作品を生む必然性を与える創作の源

||

感動…津田は摂理ととらえ、「向こうから来るもの」と呼ぶ

- 「向こう」とは この世の事物の背後(向こう)にある世界

||

神の国

- 向こうから来るもの=神からの^{インスピレーション}霊 感が強いほど
制作者は表現方法や技巧のことを「考える」ことが少なくなる(忘れている)

||

感動—対象に惹かれ愛する—ゆえに自分のことを忘れている状態

↓

意図的なものは消え失せる

このとき画家は見えてくるものをなぞるだけでよい

- 心の奥深くで対象との一体感を味わいその本質とともにある

|

何ものかに「描かされている」という一種受動的な状態

- 「自画像」に見られるがむしゃらさ…「見えないもの」を追っているから

「海辺の馬」…力みは感じられない

目の前に感動を与えたものがなくとも

心の中にありありとそのものを想い浮かべ、

そのものと共にある

||

いつまでも感動を持続できるから

||

「観想」の力の増大

※観想…心理、実在を他の目的のためではなく、それ自体のために静かに眺めること
キリスト教では、魂の内奥において神との一致を遂げる靈魂の高度な状態を指す。また、修道生活の様式を表す語でもあり、修道者が自ら祈禱、黙想に潜心することを言う。

- ・この絵は修道士になるための修練期間中に描かれたもの。
布教と観想が中心の生活の中、絵は道楽のようなものと思われた。
絵を描く時間も画材も自由にならない状況

↓

逆転してすべて彼に幸いする。

- ・画材が自由にならない。

↓

色鉛筆のようなどこにでもある素材を使わざるを得ない。

↓

色数が限定されているので、
思う色に近い色を選んでまず単色で塗らざるを得ない。
→重色によって望む色に近付けるが限界がある。
→最初に選んだ色の効果が大きい

↓

思う色が自ずと純色に近くなり、感動を強調する効果。
(思うようにいかない不自由さゆえに)最初の感動を画面にとどめやすくなる。

- ・結果として
追求にはやる気持ちが抑制される。
制限によって落ち着きをもたらされる。
それがかえって感動の持続に結びつく。

純度を失わない色の並置→微妙な色合い(色彩の効果を学ぶ)

- ・制作時間の少なさ→制作意欲を最大限に蓄積させる。
過剰な追求のエネルギー→布教の道すがら彼を感動させる対象への愛に凝集、昇華。

- ・「忙しい方が描けるのです。
描き過ぎるより描き足りない方が良い。
借しいところで邪魔が入るのは良いことだ。
暇があり、無制約に自由であるより、
規律にしばられ自分の意志が抑制される方が、万事によい。
仕事も例外ではない。」

(津田季穂の言葉)

- ・「芸術上の労作にも、信仰のかたさにもなくてはならないもの、
それは非常な情熱を必要とするが情熱とは忍耐であると私はいいたいのです。
若しくは最上級の言葉を使うならば“愛”です。
“終りまで耐え忍ぶものは、救われるべし”
人生に於て又、人間の本質に於て忍耐だけが、私達を平安にするのでしょう。」

(津田季穂の言葉)

- ・このように鍛えられ強められた愛こそが、
自然の事物のうちに垣間見た永遠の相を、
時間と空間を超えて、
彼の内に永くとどめ置くことができるようにした。
- ・ここに至る背景には彼の長い放浪生活がある。
多くの人々や風景と出会い、愛し、別れてきた放浪生活。
「別れ」こそは物事の本質を顕わにする。

普段共に居るときには新鮮な何ものも感じられずとも、
別れのときには、胸の奥から込み上げる感情とともに
そのものの本質を感じ取るもの。

↓

普段は物事の表層をとらえていたものが、
別れに際して全身全霊でそのものと真剣に関わろうとすることにより
(己を棄て相手を大切にしようとする事により)
物事の深い相—真の相を垣間見る。

俊明さん

津田季穂

我は富めり、豊にして乏しき所なし、と言いつつ、其実は不幸にして憫むべく、
且貧しく且瞽にして且赤裸なるを、知らざるなり。 一黙示録(3-17)

何をしたらいいか、
わからない。
何になったらいいか、
どうしたらいいか、
わからない。

見てみるのだが、
どれも、
これも、
虚栄と妥協、だまし合いで、
みんなお上品なんだな。

その反対らしい淵に飛びこんだ。

豊かに富んだお座敷でなく、
窟を入口にたらしめた乞食小屋だ。
ここが私の家よ、という子供達。

人間の富、豊かさ、栄光にさからって、
汚辱と惨めさを 底の底まで味わった。

心も、

肉体も、
破れて限界に達した時、
はかり知れぬ偉大な愛が
私をつかまえていた。

我汝に勸む、火にて験されし金を、富まんために我より買え。又身に纏いて
汝が赤裸の恥を顕さざらんために、白き衣袋を買え。又見ることを得んため
に、汝の目に目薬を塗れ。我は我が愛する人々を買め且懲らすなり、然れば
奮発して改心せよ。

—黙示録(3-18-19)

- ・放浪生活…表相に執着する甘さが排除され、
真の相(本質)を覗ようとする態度が強められる

修道生活…「画家であること」「芸術至上主義」にも別れを告げる
→かえって芸術の奥義へと導かれる
…「永遠」なるものの懐で遊ぶ芸術

- ・これらは「思いがけなく」
つまり彼の意志ではなく
「向こう」からやってきた。

修道士になったことも、自分の意志からではない、と彼は言う。
「結婚するあてもないし、修道士になったらどうですかと人に言われて…」

↓

これは自然に 事がそのように運んだ、ということ

このようなことも彼は「向こう」からやってきた、と表現する

||

この世の背後にあるあちらの世界

||

津田の求める高次元の世界

であるならば、「自然に」という言葉は「超自然的に」と置き換えた方がよいのかもしれない。

*「自分の意志じゃなくて、向こうから来るものを待つ間は、ずいぶん辛抱がいるでしょうと言われるけれども、私は辛抱していませんね。辛抱しなくてもどんどん来ますから。」

「信仰にしたって、絵を描くにしたって自然にやっていたらいいでしょう。もし描けなくなったら、やめればいいしね。別に絵を描かなきゃならないというわけでもないんですからね。信仰だって、強制されてするわけじゃない。」

津田季穂の言葉

(※高橋陸郎との対談「自然のままに」の中で語られたもの
カトリック幼児教育誌『ひろば』春季号69 1976年 至光社)

4. 癒しをもたらす場所 —「田舎道」(1973年)

- ・現場で最後まで描かれたのではなく
記憶に頼って描かれた時間が長い。

しかし筆致には迷いが無い。

一筆入ると次にはどのポイントに筆を入れたらよいか
自ずと見えてきたかのよう。

↓

何もかにも導かれるように筆が運ばれている。

- ・心の中にこの風景をありありと再現できたから。
空気や匂いや音をもよみがえらせ、
あたかもそこにいるかのような感覚を起こすことができたから。

||

対象を愛することによって、時空を超え

己の意識の深みにおいてそのものにつながる。

そのものの本質をつかむ、というよりもそのものと一体である。

そこには深いよこびがある。

- ・対象と人とは真に出会うこの場所こそ「向こう」の世界と直結する場所。

主観が深い意識次元で普遍的なものにつながるので、強調された色彩も自然に見える。

- ・津田は深くその意識の奥に入り、そこで触れたものを描く。

↓

作品を見る者も、その経路の跡を辿る。

そして自らの奥にある平和な場所に辿り着く。

その場所こそ真の癒しをもたらす場所である。



5. 無名なるもの —「漁夫の子供」(1977年)

- ・対象の背後にあるこの上もなく大切なもの

||

道ばたに咲く名も知れぬ小さな花の美しさ

自らは退いて光を浮かび上がらせる影の美しさ

無名の素朴な人たち、

この世でうまく生きていけない人たち

||

津田の看病疲れがもとで亡くなった

目立たず優しい母

無名なるもの

- ・自然や、人の心に潜む純粹極まりないもの。
それは未だこの世界では相当の扱いを受けず、
往々にして人の目からは隠れた目立たないところにあり、



はかなく感じられるが、時に心の底から人を衝き動かす真の力。
そよ風のように我々の心を通り過ぎる何か。
意識の表層にふと浮かび上がっては消える何か。
とらえようとしてもとらえられない何か。
しかしそれに触れるとき、それこそが我々の命を支えているのだとわかる何か…。

津田の信仰によれば

「無名なるもの」の復活の権化 → イエス・キリスト

津田の大切にすることがこの世において不当な扱いを受けているように
キリストもそのような扱いを受け、十字架上で死んでいく。

↓

キリストのよみがえり＝無名なるものの復権

・津田の芸術 … 「無名」なるものの美を形あるもの(作品)にする = 復活の業

「純粹に、本当に大切なことを大切にすれば、
必要なものはすべて向こうから与えられる。」
本当に大切なことを大切にすれば、我々の理解を超える不思議な力が働く。

不思議な力…無名なるものに潜む、秘められた復活の力

我々の不完全さを補って余りある力、

不完全さをこそ逆の良きものへとひっくり返す—変容させる—力

||

この世の物象の属性である影を、光へと昇華させる力

・津田は絵を描くことで来たるべき世界を予見する。
それは津田の大切にした無名の、純粹で、素朴なものが
暗れ暗れと翹えるすがすがしい世界、
あの「漁夫の子供」がいるような世界ではないか。

・黙示録 (21-1~4)

わたしは、新しい天と新しい地とを見た。…わたしは、玉座から出る大きな声が、こう言うのを聞いた。「見よ、神の幕屋は人とともにあり、神は人とともに住み、人は神の民となる。神ご自身、彼らとともにおられ、彼らの神となる。神は彼らの目から涙をことごとくぬぐい去ってください。もはや、死もなく、もはや、悲しみも、嘆きも、苦しきもない。先にあったものが、過ぎ去ったからである。」

・「今」「ここ」をもう一度自分の眼で見つめ直してみるならば、
そこに至上の宝(永遠のふるさと)を見出すことができるということを、
津田の芸術は示している。

・とにかく、常に描くこと。
純粹に描き腕けること。
意図的になってはいけないということ。
そして無名で通すこと。
そうすれば、神様は決してそういう人を
ほっておかないんですよ。

1979. 8. 23 津田師の言葉